

歴史学と「生活」

前沢伸行

鹿野政直の新著『近代日本の民間学』（岩波新書、一九八三年）を読んだ。「民間学」とは聞きなれないことはだが、鹿野によれば、「どうすれば人間が学問の主人公となりうるか、いいかえれば、つうの市民が学問への自発性を喚起され持続し、それによって既存の学問を点検する気運をたかめ、さらに学問の新しい枠組への途をひらいてゆくか」を考え、その意識を過去に投影させるとき、「近代日本において、富国強兵の学としての官学アカデミズム」のそとに一定の体系性をうちたてつつ結実した学問」が存在したこともつ意識が大きく浮かびあがってくる。こうした学問を総称して、鹿野は「民間学」と呼ぶ。本書では、「民間学」の代表的担い手として、柳田国男・伊波普猷・津田左右吉・南方熊楠・柳宗悦・喜田貞吉・高群逸枝の七名が取りあげられており、これらの人々の残しているいずれも膨大な著作やその生涯の軌跡のなかから、それぞれの学問の独自性を浮かびあがらせるものに焦点を絞って検討が加えられている。鹿野のみるところでは、「民間学」に共通する主題は「生活」にあった——「柳田国男をはじめとする創始者たちは、『国家』へ『公』のまえに『私』として貶視せられ唾棄させられた『生活』、また『近代化』によって往々に破壊さ

れてゆく『生活』を、正面からみつめる学問上の主題とすることによって、『生活』の復権をはかるとともに、社会に問題を提起したのであった」。

私が鹿野の研究にはじめて接したのは、一九七〇年前後のことであった。「民衆思想史」と呼ばれた研究の潮流が、顕著な成果をあげていた時期である。私は、色川大吉『明治精神史』一九六四年）や安丸良夫（『日本の近代化と民衆思想』一九七四年）の書物とともに、「民衆思想史」を代表する研究者と目されていた鹿野の著作（『資本主義形成期の秩序意識』一九六九年）に眼を通したのである。これらの人々は、色川が明確に述べているように、一九六〇年の安保闘争を政党組織・知識人と一般国民の乖離に起因する敗北・挫折の過程としてうけとめながらも、こうした敗北体験のもつ意味を捉えるために過去にさかのぼって、幕末から明治にかけての革命的運動の再検討に向かったのだった。しかしながら、「未発の契機」・「底辺の視座」や「通俗道徳」などの概念をもって当時の一般の人々の意識や行動を鮮やかに形象化した色川や安丸と比べると、鹿野の仕事は地味であった。

それから一三年の歳月が流れた今、一九六〇年代の「民衆思想史」を主導したこれら三名の研究者のその後の軌跡は対照的である。土俗の世界に属する人々の生き方を近代代立場から執拗に追究する色川、ひたすら百姓の世界に沈潜する安丸に対して、私は、徐々にその守備範囲を拡大しつつ、自己の歴史観を何とか概念化しようとしている鹿野の歩みに注目したい。とはいっても、私は鹿野の必ずしも忠実な読者であったわけではない。一度だけ鹿野の講演を聞いたことがあったが、それも、たまたま古代ロ

マ史関係の講演が同時に予定されていたという偶然にすぎなかったのである——その講演は後に「日本文化論の歴史」として、『史学雑誌』（八七編三号、一九七八年）に発表された。この講演の冒頭で鹿野は、それまで従事してきた、地に足のつかない観念の歴史である思想史から「地面に足をおろした歴史」としての「生活史」へ降りていくためには、ワン・クッション置く必要がある、それが文化の問題を論ずる理由である、との趣旨の発言をしている。また、「生活史の構造」を明らかにした上で、いずれは「社会史つまり全体史」へと視野を広げたい、とも付け加えている。歴史学の枠組をめぐるそれまでのスコラ学的議論にうんざりとしていた私にとって、「生活」をキー・ワードとして歴史学の新しい枠組を構築すべしという主張は、印象深く感じられた。

しかしその後、鹿野とは異なる立場から、一般の人々の日常生活に焦点をあてた歴史研究の新しい流れが登場してきた——「社会史」と呼ばれる潮流である（これについては、本誌創刊号に大江一道氏が執筆されている簡にして要を得た概観を参照されたい）。私は、「社会史」的研究の問題提起には共感を覚えるものの、今なお一抹の不安を捨てきれないでいる。それは、マルクス主義史学と「近代主義」史学を中核として顕著な業績を残してきた「戦後歴史学」に対する「社会史」の關係がいま一つ明確でないこととともに、特にヨーロッパ史の分野では、こうした研究動向は結局のところ「アナル学派」などの受け売りに終わってしまうのではないか、との危惧をぬぐうことができないからである（「西洋」史研究において、最も重要だと思われることは、それが現代の日本という大地の上に自らの足で立つことである。わが国の「西洋」

史研究の独自性とは、畢竟そうしたことの結果にすぎない。そのためには、私たちの研究は広く国民の間に根をおろしたものとならなければならない。戦前・戦中のおが国の学問がいかに国民から遊離した形で行なわれてきたか、そのために時代の流れに抵抗する力がいかに弱かったかを考えるならば、このことは銘記されねばならない。

私が「社会史」に対してこうした危惧の念を抱いている時に、鹿野の『近代日本の民間学』が発表されたのである。この書物は、前述の講演で語られていた、思想史から、文化の問題の検討を経て「生活史」の構築へ向かうという道程のなかで、確実な一歩を進めたものとなっている。鹿野の歩みは慎重・着実である。それとともに、「民間学」に対する着目は、やはり鹿野ならではのものである。かつてある出版社の企画に編集委員として加わった鹿野は、同席した他の委員がすべて国立大学出身者であったことに一種の気おくれを感じた、と卒直に告白している（新版『岩波講座日本歴史』二六巻「月報」、一九七六年）。私大出身の鹿野だったからこそ、「民間学」のもつ現代的意義に照明をあてることができた、との感が私には強い。現代日本の現実のなかに着実に根をはった新たな歴史学の枠組の創造は、おそらく、こうした手続を通じてのみ可能であろう。「民間学」に関する成果を踏まえてどのような「生活史」の枠組を提唱するのか、鹿野の今後の研究に期待したい。

（まえざわ のぶゆき・兼任・西洋文化史）